

令和6年1月22日

太田市議会議員 矢部 伸幸 様

創政クラブ 代表 大川 陽一

会派行政視察報告書

期間：令和5年10月12日（木）～10月13日（金）

視察先：青森県八戸市

第85回全国都市問題会議 会場 八戸市公会堂・公会堂文化ホール

参加者：大川陽一・久保田 俊・高木きよし・松浦武志・長ただすけ・高野博善・川岸靖隆・青木雅浩（矢部伸幸は議長公務にて参加）

視察事項

会議テーマ：「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」

【第1日 令和5年10月12日（木）】

基調講演：日比野克彦氏（東京藝術大学長／アーティスト）

主報告：熊谷雄一氏（八戸市長）

一般報告：吉川由美氏（文化事業ディレクター、演出家）

花岡利夫氏（東御市長）

鈴木秀樹氏（株鹿島アントラーズFC取締役副社長）

【第2日・令和5年10月13日（金）】

パネルディスカッション：小林真理氏（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

今川和佳子氏（合同会社imajimu代表取締役）

松橋崇史氏（拓殖大学商学部教授）

頼重秀一氏（沼津市長）

山崎善也氏（綾部市長）

所感

第1日：令和5年10月12日

基調講演：「アート役割って何だろう？」

東京藝術大学長であり、アーティストでもある日比野克彦氏は「アートとは何か」について問題提起。アートとは「生きる力」や「多様性ある社会を築く基盤」、「社会的な課題に対して持続的に取り組み続けていくには大切なもの」であるなどと語る。アートと社会とを繋げたプロジェクトの例などが数多く紹介され、アートへの認識を新たにすることができた。地方自治においても、地域課題におけるアートの役割について考える契機としたい。

主報告：「八戸市の文化・スポーツによるまちづくり」

八戸市長、熊谷雄一氏は八戸市の概要を紹介。八戸市は人口約22万人の中核都市で、有数の水産／工業都市でもあり、国際物流拠点としても着実な発展を遂げてきた。世界遺産「是川石器時代遺跡」をはじめとする出土品や、ユネスコ無形文化遺産「八戸三社大祭ば山車行事」などの伝統文化を生かしたまちづくりにとる組んできたという。さらに、古くからスケートが盛んなことから「氷都」を標榜。屋内スケートリンク「YSアリーナ」をオープンして市民にスポーツの楽しみや学びの場を提供。プロスポーツも盛んで、文化とスポーツを活かした都市経営には本市との共通点があり、参考となるものが多かった。

一般報告：「まちづくりの活力は地域に根差した文化政策から育まれる」

文化事業ディレクターの吉川由美氏は、幅広い分野のプラットフォームに文化を位置付け、地域社会を醸成。地域に根差したあり方のひとつを示した。「八戸ポータルミュージアムはっち」のアートプロジェクトでは、「地域の資源を大事に想いながら新しい魅力を創り出す」をテーマとし、八戸の中心街を市民の関心空間とする、八戸の地域資源を再発見して再価値化、フラットな交流と対話の場を創出するという3つの柱を提示。地域の活力と魅力の源泉は、地域の文化にあることが理解できた。

一般報告「標高差 1,500mの地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出」

長野県東御市長の花岡利夫氏は、東御市の平地が少なく標高差のある地形は土地利用としては難点が多いとされてきたものの、逆に地理的環境を地域資源として捉える発想へ転換。標高差を活用したトップアスリートの高地トレーニング施設の整備の経緯や、高齢者の健康増進など、市民や一般の人々への波及効果について説明した。地理的な難点という、解決が極めて困難な問題に対して「欠点を個性に」とする柔軟な発想に感銘を受けた。

一般報告「まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用」

株式会社鹿島アントラーズFC取締役副社長の鈴木秀樹氏は、プロサッカーチーム鹿島アントラーズが構築してきた、地域の資源としてのプロスポーツの活用の成功例を紹介。スポーツ専門のドクターが一般市民も診療する体制を整えたり、フィットネス事業や介護予防医療などの地域医療への貢献、学校での講演やスタジアムでの遠足の受け入れなど、教育や人材育成への貢献について数多くの具体例を紹介した。プロスポーツチームの有効活用例は、本市としてもおおいに参考となるものである。

第2日：令和5年10月13日

パネルディスカッション：「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」

コーディネーター役を務めた東京大学大学院人文社会系研究科教授の小林真理氏は、1970年代から展開されてきた自治体文化行政の革新性を著書にまとめてきた経験を持つ。「文化への注目を再認識することの重要性」を説き、自治体文化行政の発展と展開についての持論を展開。公民館や図書館、各物館などの社会的教育施設、ホール系の文化施設の建設と運営には時代に合わせた発想の転換が重要であり、これらの文化施設を新しく建て替えると、衰退する中心市街地の活性化の一部を担える可能性が広がることを指摘した。

4名のパネリストの一人、合同会社imajimu代表取締役の今川和佳子氏は、都市機能の郊外化によって中心市街地の求心力が減退した八戸市において、2011年にオープンした「八戸ポータルミュージアム はっち」が地域活性化の起爆剤となった事例を振り返る。「はっち」は純粋な美術館ではなく、公民館でもない複合的な機能を持つ施設。観光からアート、歴史や伝統をテーマにしたものまで多岐にわたるソフト面の事業を軸としながら「地域の魅力を再発見する拠点」としても機能し、地域の魅力を向上させる市民の主体的な活動を喚起しているという。

拓殖大学商学部教授 松橋 崇史氏は、「地域活性化におけるスポーツの役割とその変化」をテーマに掲げ、プロスポーツクラブの創設、育成、スポーツイベントの誘致や開催がもたらす地域活性化の効果を報告。「地域密着」がコンセプトのひとつであるサッカーJリーグは、元々各クラブがそれぞれのホームタウンの市民に愛されることを重視してきた。また、「物事に全力で取り組む姿勢」を可視化、共感しやすいプロスポーツは、地域の市民を精神的に元気にする効果も大きく、eスポーツなど、多様な人々が取り組めるものへの拡張性にも注目していた。

静岡県沼津市長 頼重秀一氏がテーマとして取り上げたのは「スポーツとアニメを活

用したにぎわいの創出」。静岡県沼津市で成功しているスポーツ振興、アニメの舞台としてのアピールについて紹介。大人気アニメ「ラブライブ!! サンシャイン!!」は、沼津市内の内浦地区の学校を舞台に結成された架空のスクールアイドルグループ「Aqours」の成長や奮闘を描く物語で、作品の公開以来、ファンにとっての聖地として、作品に登場する市内の各所にファンが訪れる大きな観光資源に。行政としては広報誌やSNSなどで市民の応援機運醸成を図るなどしている。

京都府綾部市長 山崎善也氏は、文化芸術が人々に感動や生きる喜びをもたらすことから、市民が文化芸術に触れ親しむ機会の創出や充実化を推進。文化芸術の所管を教育委員会から市長部局に移管し、文化芸術と地域づくりの一体化をはかっている。また、「里山合唱フェスティバル」の開催を契機として、「合唱の街・綾部」のイメージアップを推進。市の代表的な文化イベントとして定着させた。そうした取り組みにより、市の新たなアイデンティティとして根付かせ、市民の文化芸術への関心や創作意欲を高めることに力を入れている。

まとめ

今回の会議の主要テーマである「アート（文化）」や「スポーツ」は、太田市でも地域活性化に重要な役割を果たしており、今後も力を入れていくにあたって、非常に参考となる報告内容が多かった。これらを市民の生活の質や満足度の向上に繋げるべく、議論を重ねていきたい。